

第38回地域医療現地研究会を取材して

大空と大地の中で育もう地域包括医療・ケアの未来
～住み慣れた地域で完結する地域医療を目指して～

北海道 足寄町・帯広市

● 厚生科学研究所編集部 ●

第38回地域医療現地研究会は、北海道でも広大な農地を有する十勝平野の初夏を感じさせる、令和6年6月21日（金）、22日（土）の両日「大空と大地の中で育もう 地域包括医療・ケアの未来～住み慣れた地域で完結する地域医療を目指して～」をテーマに北海道足寄町、帯広市において国保直診・国保事業関係者、さらに国保直診開設者である首長など、163名が参加して開催。帯広市は、北海道東部の十勝平野中央に位置し、日高山脈や大雪山系の山岳と十勝川水系の河川が織りなす豊かな自然に囲まれ、全国的にも有数の日照時間に恵まれ、農耕に適した地域である。また、足寄町は帯広市から東北に65kmほど離れた中山間地域で、香川県の面積の3分の2、東京ドーム約3万個分に相当する、1,408km²という広大な面積を有する地域である。東に阿寒摩周国立公園、麓には碧く美しいオンネトーがあり、広大な大地を生かした放牧酪農や畜産業とカラマツにこだわった林業が盛んである。

現地研究会1日目：6月21日（金）

〔開講式〕

1日目は午前9時より帯広市のホテル日航ノースランド帯広（写真1）2階「ノースランドホール」で開講式が行われた（写真2）。はじめに国診協小野剛会長から挨拶があった。小野会長は「新型コロナウイルス感染症に翻弄された4年がすぎようやく日常が戻ってきたが、いまだコロナが散発的に発生している地域もある。地域住民の感染症予防や健康



写真1 ホテル日航ノースランド帯広



写真2 開講式

を守るため使命感を持ってそれぞれの立ち位置で、日々奮闘されている国保直診の職員の皆様に心から敬意を表する。

また、本年1月1日に発生した能登半島地震から

6か月が経過した。国診協では被災された会員施設への支援として募金活動を行い、全国から多くの支援金をお預かりした。皆様方から預かった支援金は、3月27日に石川県国保診療施設協議会を通じて多くの被害に遭われた能登半島北部の会員施設に分配させていただいた。被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を祈念している。

本日と明日開催される地域医療現地研究会は、1987年から長年開催されている国診協主要事業の一つである。全国の国診協会員が地域包括医療・ケアを積極的かつ先進的に取り組んでいる会員施設に集まって現地の気候・風土にふれながら視察研修を行い、また現地の方々との交流の中で地域包括ケアシステムの真髄を学ぶことを目的としている。国保直診の多くは離島・へき地・中山間地域であるため、いち早く高齢化と人口減少の進む地域に存立し、厳しい環境の中で予防・医療・介護・福祉が一体となった地域包括医療・ケアを実践してきた。国診協では多くの地域が縮小する中で国保直診の近未来のビジョンが必要と考え、「国保直診のありたい姿」をとりまとめ公表した。本研究会のメインテーマである「大空と大地の中で育もう 地域包括医療・ケアの未来～住み慣れた地域で完結する地域医療を目指して～」は、まさに国保直診のありたい姿に直結するテーマだと思う。全国の国保直診の皆様がここ北海道に集う現地研究会を開催できることを大変うれしく思っている。足寄町国民健康保険病院と高齢者等複合施設「むすびれっじ」を視察研修することは、われわれ国保直診の未来を考えるうえで大いに参考になるものと確信している」と述べた（写真3）。

次に国民健康保険中央会原勝則理事長より挨拶があり、「全国の国保直診施設の皆様方におかれては、昼夜の診療や看護・介護で多忙の中今年度の地域医療現地研究会に多数ご参加いただき有難く思う。また、日頃のご尽力に深く敬意を表するとともに、われわれ国保連合会と国保中央会の事業運営にご理解・ご支援を賜り厚く御礼を申し上げます。本現地研究会の開催にあたり主催者としてご尽力いただいた



写真3 国診協 小野会長

全国国民健康保健診療施設協議会、北海道国民健康保健診療施設協議会および北海道国民健康保険団体連合会の皆様、また、多大なるご協力をいただいた北海道庁、帯広市、足寄町ほか関係の皆様方に心から御礼を申し上げます。地域医療現地研究会は国保直診施設の原点である。われわれ国保中央会や国保連合会にとっても、地域医療の現場を視察して地元の施設職員や行政の方々と交流を図りながら、地域包括医療・ケアの実践や課題を現場で直に学ぶことができる貴重な機会となっている。

今回は足寄町国民健康保険病院や高齢者等複合施設「むすびれっじ」を視察させていただく。雄大で美しい自然景観はその地に暮らすの方々にとっては、時に厳しい自然環境になろうかと思う。少子高齢化や人口減少・過疎化という社会状況が大きく変化をする中で、工夫をこらしながら地域で医療・介護の確保に取り組まれている施設や地域を直接訪問し視察することで、国保直診施設の果たす役割を今一度確認し、課題解決に向けたヒントとしていただきたい。そして、皆様自身の業務や勤務先の診療所施設などで本研究会で得た学びをうまく活用することを願っている。

われわれ国保中央会と国保連合会では、エビデンスに基づく保険事業の取り組みを公益的かつ効果的に活用できるよう国保データベース（KDB）システムの機能改善・評価さらなる活用促進に努めている。特に北海道国保連合会では市町村におけるデータ分析等にかかる作業負担の増大という課題に対応するため、KDB エキスパンダーという健康医療情



写真4 国保中央会 原理事長



写真6 渡辺俊一・足寄町長



写真5 石田智之・帯広市市民福祉部担当参事



写真7 宮森隆之・北海道保健福祉部健康安全局長

報分析プラットフォームを独自で構築し、北海道と連携して将来に向けた予防健康づくりを支援するための環境整備を進めている。また、マンパワー不足により保険事業の実施に苦慮している市町村に対してはKDB エキスパンダーと連動した伴走型支援も行っている。

国保直診施設の皆様にとっては、すべての地域住民の診療や健康づくりに従事されていることだと思う。しかし保険者における健康づくりとなると医療保険者間と介護保険者間の横の連携が不十分で、生涯に向けた健康づくりの道りはなかなか遠いのが現状である。このような状況の中で本会においても昨年末から保健事業の支援が行き届かない市町村に対して国保保険者と一体となって特定健診・特定保健指導等を行うモデル事業を全国2か所で始めている。われわれ国保連合会と国保中央会は国保直診施設や国保保険者の皆様と一体となってそれぞれの地域の実状やニーズに沿った形で、地域住民の医療の確保や健康づくり、地域包括ケアシステムのさらな

る進化・推進、地域づくりに大きな役割を果たしたので、引き続きご理解とご協力をお願いしたい」と述べた(写真4)。

続いて米沢則寿・北海道帯広市長代理の石田智之・帯広市市民福祉部こども健康担当参事(写真5)および渡辺俊一・北海道足寄町長から歓迎の挨拶が行われた(写真6)。次に来賓として厚生労働省保険局国民健康保険課長・笹子宗一郎氏(当時)からビデオメッセージによる挨拶があった。次に北海道鈴木直道知事の代理として北海道保健福祉部健康安全局国保担当局長の宮森隆之氏より挨拶があった(写真7)。最後に足寄町国保病院長の村上英之氏から視察する足寄町国保病院と高齢者等複合施設「むすびれっじ」の施設概要の説明があった(写真8)。開講式終了後、会場のホテル日航ノースランド帯広から4台のバスに分乗し(写真9)、帯広市の風景や足寄町の放牧酪農の様子(写真10)を車窓より見学しながら、ネイバル足寄で昼食後再びバスにて各研修施設に移動した。



写真8 村上英之・足寄町国保病院長



写真11 足寄町国保病院



写真9 4台のバスに分乗



写真12 感染予防のためマスクと靴カバーを着用



写真10 足寄町の放牧酪農

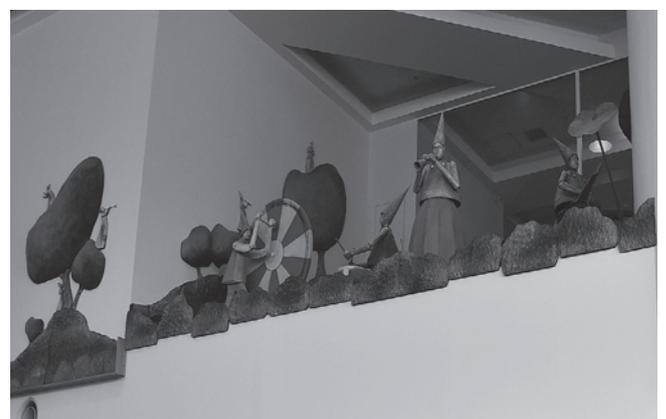


写真13 松山千春氏から寄贈された人形時計

[施設視察研修]

○足寄町国民健康保険病院

足寄町国民健康保険病院（写真11）では、感染予防のため参加者全員マスク着用し靴カバーを付けた（写真12）。1階エントランスロビーの上部には、病院新築時の平成13年に足寄町出身でシンガーソングライターの松山千春氏から寄贈された、人形の小人たちが笛・太鼓・ギターを演奏する人形時計があった（写真13）が残念ながら現在故障中であった。

1階の機能回復訓練室（写真14）では理学療法士の方から、2階のナースステーション前（写真15）では看護師の方から説明があった。それぞれ医療資源が少ない中で地域住民のためにいろいろ工夫されている話があった。特にリハビリでは4名のPTの内2名が訪問を行っていること。また、老健施設が本年3月から廃止となってリハビリ難民が出る中、足寄町に隣接する陸別町にも介護施設へのリハビリ支援を行っている話には感動した。



写真 14 機能回復訓練室



写真 17 むすびれっじ廊下



写真 15 ナースステーション前



写真 18 らわんブキの見学



写真 16 むすびれっじ外観



写真 19 鳥羽農場でのらわんブキの試食

○高齢者等複合施設「むすびれっじ」

高齢者等複合施設「むすびれっじ」（写真 16、17）では、小規模多機能施設・生活支援長屋・認知症高齢者グループホームがある。利用年齢は 80 歳台が 48% と多い。特に非介護施設系である生活支援長屋は病院を退院して自宅に戻る前に農繁期など家族が忙しい時に冬期間など自宅での生活が厳しい時期に介護施設等の入居待ちをされている方が利用されている。同施設の利用実績では、新型コロナ

ウイルス感染症拡大前の令和 2 年度は稼働率 70.1% だったが、コロナ禍以降低下していき令和 5 年度は 37.3% であった。今後稼働率を向上させるための対策に苦慮しているとの話だった。その後、バスで 3 か所の観光施設に向かった。まず、足寄町の特産である、らわんブキの見学と鳥羽農場での試食（写真 18、19）。次に道の駅あしよろ銀河ホール 21 での放牧牛のミルクを使用したチーズなどの特産品の見学・購入など。さらに足寄動物化石博物館（写真



写真 20 足寄動物化石博物館



写真 23 村上英之・北海道国保診療施設連絡協議会会長



写真 21 交流会



写真 24 中村伸一・国診協副会長



写真 22 山本邦彦・北海道国保連合会理事長



写真 25 足寄町雌阿寒太鼓保存会のアトラクション

20)にも訪問し、再びバスに分乗し地域交流会会場のホテル日航ノースランド帯広に向かった。

○地域医療交流会

現地研究会1日目の夜のお楽しみの交流会は、ホテル日航ノースランド帯広にて163名が参加して開催された(写真21)。はじめに山本邦彦・北海道国保連合会理事長から開会の挨拶があった(写真22)。次いで村上英之・北海道国保診療施設連絡協

議会会長(北海道・足寄町国保病院長)より歓迎の挨拶があった(写真23)。そして、中村伸一・国診協副会長より乾杯の挨拶があり、「サン・ニイ・イチ、乾杯!」の掛け声で地域交流会がスタートした(写真24)。帯広や足寄の美味しい料理を楽しみながら立食スタイルの丸いテーブルごとに参加者同士の交流の華が広がっていた。その後、アトラクションとして「足寄町雌阿寒太鼓保存会」による参加者全員の心に響く大太鼓などの演奏があった(写真25)。



写真 26 佐々木紀仁・北海道厚沢部町国保病院長



写真 29 山田康介・更別村国保診療所長



写真 27 村上英之・足寄町国保病院長



写真 30 東浦浩昭・足寄町国保病院理学療法士



写真 28 研谷智・公立芽室病院長

そして、急遽駆けつけた渡辺俊一・北海道足寄町長から「足寄町出身シンガーソングライターの松山千春氏からのビデオメッセージが届きました！」との発言があり、会場にいた参加者から驚きと喜びの声があがった。松山千春氏からは地域医療で日々活動されている国診協の皆様への御礼と期待、そしてエールをおくっていただいた。最後に佐々木紀仁・北海道国保診療施設連絡協議会副会長（北海道・厚沢部町国保病院長）より閉会の挨拶があり終了した

(写真 26)。

現地研究会 2 日目：6 月 22 日（土）

〔全体討議〕

2 日目は開講式・地域医療交流会と同じホテル日航ノースランド帯広 2 階「ノースランドホール」にて午前 9 時から「大空と大地の中で育もう 地域包括医療・ケアの未来～住み慣れた地域で完結する地域医療を目指して～」をテーマに全体討議が行われ、国診協常務理事（北海道・足寄町国保病院長）の村上英之氏が座長を務めた（写真 27）。まず、研谷智・公立芽室病院長（写真 28）、山田康介・更別村国保診療所長（写真 29）、東浦浩昭・足寄町国保病院理学療法士（写真 30）の 3 名から発表があった。

1 人目の研谷智氏から「できることから始めよう。～病院存続のための院内改革～」をテーマに発表があった。まず、公立芽室病院での「芽室劇場」負の連鎖の話がされた。その中で鹿児島県出水市総合医

療センターのQCサークル活動を参考に公立芽室病院の経営理念にあるスローガンから「できることから始めよう」と命名し院長直轄事業として令和4年2月から始動した。これがヨコ型改革で、職員間の部署を超えた横のつながりができた。

次に行ったことは自律経営プロジェクトである。これは部門別原価管理会計システムという京セラ(株)のアメーバー経営手法で、ポイントは1つ目は全職員の経営参加を促すこと。2つ目は会計管理システムを構築し、環境の変化に耐えうる経営基盤をつくること。3つ目は全職員が経営意識を持ち現場発信の経営を実践することで、将来にわたって事業を継続することである。

公立芽室病院の改革によって病院経営改革が成功した。成果は3年連続の黒字経営となり借入完済や欠損金も解消。2020年と2021年はコロナ関連補助金により黒字だったが、2022年からは補助金に依存できない意識が広がり医業収益が増加した。当院は町の地域医療政策分野を担っていて、さらに経営改革を支えるために、2011年に公立芽室病院運営委員会が中心となり、「公立芽室病院をみんなで支える会」が設立。町が運営する公立病院を、「あってあたりまえ」と考えるのではなく、「自分たちも一緒になって守ろう」と考え、町民主体の活発な活動を行っている。

コロナ禍が明け、病院に「公立芽室病院で働く皆さんへ 感謝と応援の言葉を お疲れさま ありがとう がんばれ」という真心こもる看板を「公立芽室病院をみんなで支える会」が掲示してくれたとの報告があった。

2人目の山田康介氏は、「北海道の魅力ある田舎を元気な姿で次の世代に託す～地域医療にできること～」をテーマに発表があった。更別村国保診療所は南十勝の人口3,000人の更別村と人口4,000人の中札内村の医療圏を担当している。帯広市へは車で約40分、帯広空港には車で15分という良好なアクセスである。両村は十勝の肥沃な大地で農業収入が高く比較的裕福さを感じられる地域で、高齢化率も30%と低めで消滅可能性自治体2024を両村とも免

れている。

なぜ更別村と中札内村の2村の医療を紹介するのかというと、3年前から2村の村立診療所を北海道家庭医療学センターが委託を受けて運営することになったからである。総合診療/家庭医療専門医・指導医と専攻医の合計5.5名の体制で2か所の医療機関を担当している。2か所の医療機関の役割を明確化し2村の地域医療を一体的にマネジメントしている。更別村国保診療所は約10床の機能強化型在宅療養支援診療所であり、乳幼児から高齢者、外傷からメンタルヘルスまでなんでも相談できる外来や退院支援を主たる機能とした入院医療、訪問診療や通所リハ・訪問リハ、さらに365日24時間の患者受け入れも行っている。更別村国保診療所をセンター的な機能をもった医療機関としているので、中札内村立診療所は更別と同じ外来機能と通所リハと訪問リハも本年から行うことになった。

具体的な事例としては、1つは2013年から2018年に行った在宅医療・介護連携推進事業である。訪問看護ステーションのサテライト設置、在宅医療・口腔嚥下機能への介入のための歯科の誘致、ICTを利用した医療介護連携システムの導入、連携コーディネーターの設置である。これらはすべて推進事業のプロジェクトチームから生まれたものである。2つ目は生涯活躍のまち構想である。青年海外協力協会の協力のもと、障がい者の就労支援機能をもった「カフェゆ〜ゆ」を温泉とデイサービス・社協の事務所があり人が集まる施設で運営することなど、世代や障がいの有無にかかわらず居場所や役割のあるまちづくりを行っている。3つ目はデジタル田園都市構想を通じたコミュニティナースの誘致である。鳥根県雲南市のコミュニティナースカンパニーでトレーニングを受けた3人の若者が、コミュニティナースとして当村に赴任して高齢者の孤立を解消し、人と人をつなぎ相互の助け合いを生みだして地域を元気にしていく活動に取り組んでいる。4つ目は更別・中札内村共催の介護入門者研修で、介護人材を地域で育てていく事業で、自分事として介護を考えるためのものであるとの報告があった。

3人目の東浦浩昭氏は「住み慣れた地域で完結する地域医療を目指して～当院リハビリテーション科の取り組み～」をテーマに発表があった。足寄町の人口は約6,000人、高齢化率40%を超えている。足寄町国保病院は一般病床60床、医師常勤5名（内科4名・外科1名）、リハビリテーション科は理学療法士4名でその内の2名は訪問リハビリを担当している。足寄町では医療を中心に患者さんにとって必要な居場所で満足できるケアを行う地域包括ケアシステムを構築している途上である。当院の行政と福祉活動のかかわりでは、当院は1.5次救急を受け入れており急性期は帯広市の専門病院と連携し回復期と生活期の地域完結型の医療を担っている。地域包括支援センターと当院の医療連携室が連携し、患者さんがその地域で安心して過ごせるためには何が必要かを評価して関係を整えて支援していくことが必要と考える。

足寄町では脳血管疾患や運動器疾患などで骨折をしてしまうと帯広の救急病院に入院する。退院後ADLが低下して自宅に帰っても生活できないため、そのまま帯広市の施設に入所する状況を強いられていた。そこで、在宅を中心としたシステムを検討して平成26年に高齢者等複合施設「むすびれっじ」が設立された。現在はグループホーム、地域交流施設、生活支援長屋が設置されている。この施設はすべての棟がつながっており自由に行き来できる。その中でも足寄町独自の施設である生活支援長屋は、高齢者など支援が必要な時に一時的に生活できる施設になっており、介護度に関係なく在宅に復帰するために患者さんが生活に慣れていただくためのものである。その他、自宅で生活することができない方や農繁期でご家族が面倒をみれない方など農繁期に入所できる施設である。さらに高齢者住宅などを隣接させて地域交流施設で交流できる体制にしている。このように施設にこもらせないように元気な方も介助が必要な方も一緒に楽しめる環境を整えている。

地域包括ケアシステムにおけるリハビリテーションの役割は自助、互助、共助、公助という4つが連携して支えることが必要と考えられている。

この中でもリハビリテーションの役割は非常に重要と考えられていて、リハビリによって心身の機能を向上させ生活環境を整えていき、地域での生活が可能になると思われる。そのためにも救急から在宅支援にいたる継続的なリハビリテーション支援が必要と考える。高齢者の方は加齢に伴う生理機能の低下が起こり、在宅でも動かないと外出しなくなり元気がなくなってくる方が増えている。肺炎で入院して1週間臥床状態が続くと元気な患者さんでも短時間で動けなくなる危険性がある。このような生活不活発病を防止していくことが高齢者には重要と考える。そのためにも継続的なリハビリテーションが重要である。

地域包括ケアシステムのキーワードでは、連携・在宅・地域があるが、当院のリハビリテーション科もこれにしたがって対策を行っている。当院のリハビリテーション科の業務内容の中で特徴的なものを紹介する。2番目の短期集中リハビリ入院とは、機能低下していく水際で入所していただき、2週間から4週間に集中的なリハビリを行って在宅に帰っていただくものである。一方、足寄町の唯一の老健施設が本年3月で人手不足のため廃止となってしまい通所リハを受けていた20名から30名の方が、リハビリが受けられない危機的な状態が現在起こっている。その方々をいかに支援していくのかを思案している。4番目の人工透析中リハビリも特徴的なものと思う。6番目は足寄町と陸別町への訪問リハビリである。対象者は要介護認定者で利用者は増加傾向である。

現在足寄町で介護保険のリハビリを利用できるのは当院のみで、片道30kmの地域もあるがリハビリを必要とする方がいる限り訪問リハビリは行っていると思う。在宅生活を行うためには在宅でのリハビリは重要であると考えている。7番目は介護施設等へのリハビリ支援である。いろいろな介護施設に出向き介護士さんへの運動や動作指導を行い介護士さんに理学療法士の役割をしていただく指導を行い、要介護認定を受けている方がリハビリ難民にならないように対策をしている。9番目は隣町の陸別町へのリハビリ支援である。陸別町にはリハビリの

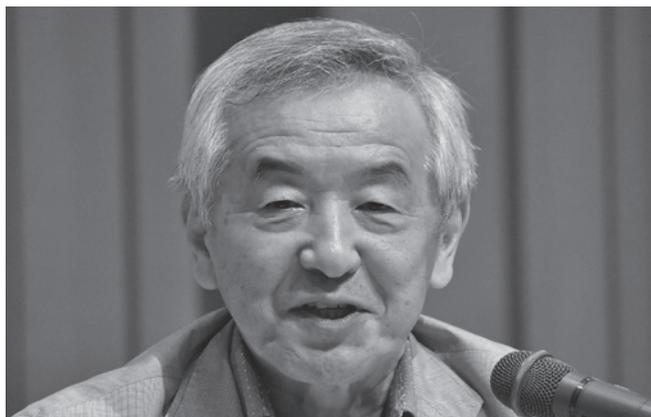


写真 31 原勝則・国保中央会理事長

有資格者が不在で、高齢社会を迎えリハビリの必要性が増加しており、陸別町のケアマネさんより当院からリハビリの指導に出向いてほしいとの相談があったことがきっかけである。平成 30 年 4 月から月 2 回でスタートしたが、現在は月 1 回である。

今後の展望として予防・在宅・地域が重要と考える。予防は要介護状態になるのを防ぐ水際対策である。多職種で連携してリハビリの普及を行っていき、在宅でも機能を衰えさせないことが必要と考える。地域性も多職種連携から足寄町と陸別町のような地域連携が必要と思う。そして、地域の実情や特性に合わせた対応や介護施設への指導など既存の制度の枠を超えた対応を行っていきたいと思う。このような対応が、住み慣れた地域で完結する地域医療の実現になるものと考えているとの報告があった。

3 名の発表後、まず国民健康保険中央会理事長原勝則氏より助言があった（写真 31）。発表者 1 人目の公立芽室病院長研谷智氏からは、組織や地域の関係者が同じ認識に立ちビジョンの共有をして何をめざすのかということが大事であることが話された。これをきちんとやらないと地域包括ケアシステムにおける住民の助け合いや医療と介護の連携などはうまくいかないと思う。公立芽室病院はすばらしい取り組みを徹底的に行ったことで 3 年目に成果が出てきたと聞いていた。また、鳥根県などの好事例を参考に横展開を実践していること、最後は住民の皆さんが病院の支えになる話に感動した。2 人目の更別村国保診療所長山田康介氏からは在宅医療・介護連携推進事業を取り組みきちんと評価されているこ



写真 32 大原昌樹・国診協副会長

と。更別村と中札内村の 2 村の地域医療を 5.5 名の医師で運営していることは山田先生方の力を感じた。3 人目の足寄町国保病院理学療法士東浦浩昭氏からは老健施設の廃止など北海道での介護人材不足の深刻さがうかがえた。昨日視察させていただいた、足寄町国保病院と高齢者等複合施設「むすびれっじ」、高齢者住宅、地域交流施設などを組み合わせて行っている一つの地域包括ケアシステムの形で、その中で生活支援長屋は良い取り組みだと思う。

公的保険の枠の中に入らず、公的制度では救えない課題があり、人がいる。そこをどのように埋めていくのか、その答えの一つが生活支援長屋であると思う。しかし現在赤字という課題があるということでも思ったのが足寄町と陸別町との自治体同士の協力で解決策が出てくると思われる。たとえば、生活支援長屋に足寄町以外の町からも入居者を受け入れる発想もあると思う。今回の 3 人の発表で共通して言えることは、これからの社会保障については最後は地域づくりだということ。人口減少・少子高齢化・過疎化が進んでいるところは地域づくりを意識して行わなければならないことを痛感した。地域づくりのキーマンはやはり首長である。地域が連帯し協力して各首長の意向や熱意でいろいろな取り組みが動いていくものと思う。そして医療のキーマンとしては国保直診施設が中心となること。さらにサポーターは住民である。住民の皆さんと一緒に取組んでいくことであると話した。

次に国診協副会長大原昌樹氏より助言があった（写真 32）。発表 1 人目の公立芽室病院長研谷智氏



写真 33 大谷順・雲南市立病院事業管理者

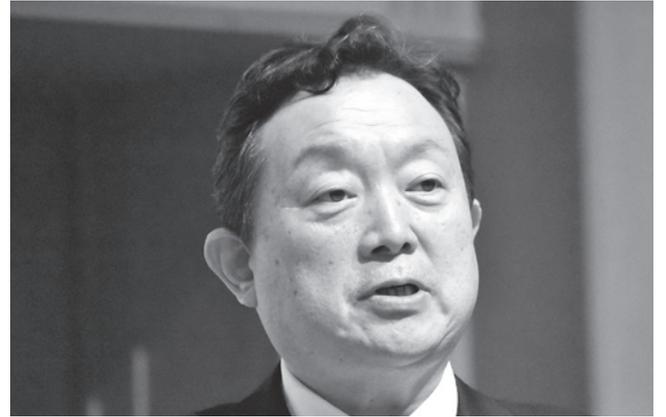


写真 34 磯崎一太・洋野町国保種市病院長

からは、病院が利益を出していることは難しいと思う。スタッフ全体で共通意識をもって行っていることがベースになっている、また住民の方も協力していることも病院経営発展の元になっていると感じた。

2人目の更別村国保診療所の山田康介氏からは、何でも相談できる診療所で、若手を育成していること。2つの村を5.5名医師で地域全体をみること。かかりつけ医機能については国診協でも注目していて、山田先生の施設が機能を広げて地域と連携していること。デジタル田園都市構想やコミュニティナースの話もあり感動した。

3人目の足寄町国保病院理学療法士の東浦浩昭氏からは、高齢者等複合施設「むすびれっじ」は地域のニーズに合ったものと思うので発展してほしいと考える。また、足寄町国保病院リハビリテーション科の理学療法士が東浦さんを含めて4名体制という少数精鋭で訪問リハビリも行っていること。さらに隣接する陸別町にも出向きリハビリ支援を行っていることに驚いた。

全体を通して3人の発表をお聞きし、国保直診の皆さんが行政の方と協力しながら地域を守っていることを感じた。最後に国診協では、「国保直診ありたい姿」の報告書を本年4月に公開しているので、こちらも活用し国保直診の運営の参考にしていただければと思っている。

[閉講式]

11時より閉講式が行われた。まず次期開催地で



写真 35 海保隆・国診協副会長

ある鳥根県雲南市の大谷順・鳥根県国保診療施設協議会会長、雲南市立病院事業管理者（写真 33）より挨拶があった。テーマは「神話と歴史のふるさとで地域包括医療・ケアを語る～人口減少社会への挑戦 地域共生社会の実現を目指して～」であり、令和7年5月30、31日に松江市のホテル一畑で開催との報告があった。視察研究施設は雲南市立病院と附属掛合診療所および住民団体「躍動鍋山」の拠点である鍋山交流センターである。

次に第64回全国国保地域医療学会学会長の磯崎一太・岩手県洋野町国保種市病院長（写真 34）より本年10月4、5日に盛岡市で開催される学会の紹介があった。最後に国診協副会長の海保隆・千葉県国保直営総合病院君津中央病院名誉院長（写真 35）より、開催地への謝辞と全体のまとめとして閉会の挨拶があり、第38回地域医療現地研究会の2日間の全日程が終了した。